



Title	「バルヒー学派」について
Author(s)	竹田, 新
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2004, 4, p. 77-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105863
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「バルヒー学派」について

竹田 新*

(I)

西暦9世紀後半、ヤアクービー al-Ya'qūbī (292 AH/905年以後没) の『国々』 *K. al-Buldān* に始まったとされる「諸道と諸国の学」は、10世紀に入ると、バルヒー al-Balkhī (322 AH/934年没) の『諸州の姿』 *K. Šuwar al-aqālīm*、イスタフリー al-Iṣṭakhri (350 AH/961年頃没) の『諸道と諸国』 *K. al-Masālik wa-l-mamālik*、イブン・ハウカル Ibn Ḥawqal (380 AH/990年頃没) の『大地の姿』 *K. Šūrat al-arḍ*、ムカッダスィー al-Muqaddasī (380 AH/990年以後没) の『諸州の知識に関する最良の区分』 *K. Aḥsan at-taqāsīm fī ma'rifat al-aqālīm* という、一連の「バルヒー学派」の作品を生み出し、大きな発展を遂げた、というのが有力な説である¹⁾。

こうした説を含む「バルヒー学派」に関する先行研究は、ムカッダスィーを除くと個々の作品の全貌をカバーしているとは言い難い²⁾。そこで、二番煎じの感も否めないが、本研究ノートでは、この「バルヒー学派」をあえて取り上げ、個々の作品を先行研究よりも具体的にみてみたい。作者の略歴に言及した後、作品の内容や特徴、後世への影響を紹介し、最後に、共通点と相違点とをまとめてみる。〔なお、本稿は拙稿(資料研究)「西暦9・10世紀のアラビア語地理文献について——人文地理

* 大阪外国語大学 教授

- 1) 「諸道と諸国の学」という名称は Blachère (1934) [1957, pp. 7, 110-200] や Miquel (1967) [pp. 80-81, 101, 267-330] に従う。なお、Mu'nis (1967) [p. 217] は「諸道と諸国 (al-mamālik) および国々 (al-buldān) の学」と呼ぶ。また、「諸道と諸国」という名称は、ヤアクービーより前のイブン・ホッラダーズベ Ibn Khurrahādhbih (272 AH/885年以後没) の書名に溯る。ちなみに、Blachère [pp. 113-14, 184-85, 190-91] はバクリー al-Bakrī (487 AH/1094年没) の『諸道と諸国』とイドリースィー al-Idrīsī (560 AH/1166年没) の『諸国踏破を熱望する者の楽しみ』 *K. Nuzhat al-mushitāq fī khtirāq al-āfāq* を、Miquel [pp. 268, 311] はさらにムハッラビー al-Muhallabī (380 AH/990年没) の『諸道と諸国』を、「諸道と諸国の学」に加える。次に、「バルヒー学派」という名称は、Kramers (1936) [pp. 65-66] や Maqbul Ahmad (1965) [pp. 579, 581-82] (1995) [pp. 74-101] や 'Alī (1984) [pp. 238-66] や Tibbetts (1992) [pp. 108 sqq.] に従う。なお、Maqbul Ahmad が大いに利用する Krachkovskiy (1957) [pp. 194-218] や、Hopkins (1990) [pp. 312, 314] は、バルヒー以下、ムカッダスィーまでを「古典学派」と呼んでいる。
- 2) 非アラブ人では上記の Blachère, Kramers (1936), Krachkovskiy, Maqbul Ahmad, Miquel, Hopkins, Tibbetts のほか、Reinaud (1848), de Goeje (1871), Nallino (1894-95), Miller (1926-29), Barthold (1930), Kramers (1932, 1954b), Nafis Ahmad (1947), Alavi (1965), Dunlop (1971) などの研究が代表的なものである。その他の研究については Sezgin (1992) に詳しい。また、アラブ人では、上記の Mu'nis, 'Alī のほか、Kamal (1930-32), Ziyāda (1962), Shawka (1962), Ḥamīda (1969), Sūsa (1974), Khuṣṣbāk (1975), aṣh-Shāmī (1981), Muḥammadayn (1984), Aswad (1984), al-'Arabī (1994) などの論考がある。そして Sprenger (1864) に始まるムカッダスィーに関する研究は、上記の Kramers (1954b), Miquel, Muḥammadayn のほか、Mukhlis (1973) や al-Jālūdī (1998) などが特に注目に値する。

を中心に——(2)』『大阪外国語大学論集』28号 (2003年) の一部を利用・改筆し、地図などに関する考察を加筆したものである。]

(II)

バルヒー、すなわちホラーサーン *Khurāsān* のバルフ *Balkh* の人という名で知られるアブー・ザイド・アフマド・ブン・サフル *Abū Zayd Aḥmad b. Sahl* は、235 AH/849-50年頃、バルフ近郊のシャームスティヤーン *Shāmistiyyān* 村に生まれたと言われる³⁾。若い頃にバグダード *Baghdād* に遊学して、かの地に8年間留まり、「アラブ人の哲学者」キンディー *al-Kindī* (260 AH/874年頃没) に師事し、近隣の地域を訪れたり、メッカ大巡礼 *hajj* も果たした。その後、バルフに戻り、哲学や宗教諸学の大家として活躍し、307 AH/919年頃にはサーマーン朝の書記官も務めたようである⁴⁾。そして308-09 AH/920-21年頃、地理書『諸州の姿』(別名『国々の姿』*K. Ashkāl al-bilād*、『国々の調査表』*K. Taqwīm al-buldān* など) を著したと伝えられる⁵⁾。

この書は現在不明であるが、ムカッダシーの言及に従えば、世界を20部分に分けた、それらのスケッチと世界地図で、各スケッチに簡潔な説明を付けたもののようである⁶⁾。

バルヒーの主要な関心は諸地図にあり、テキストは第2義的なものであったと考えられるが、彼のこの作品は、おそらくイラン地域など(さらに推測を大にすれば、アッバース朝イスラーム帝国)を20のイクリーム *iqlīm* (ここでは、「州」の意)に分けて記述したもので、「州」別の地誌の原形と見なされる⁷⁾。

彼の地理書はその後、イスタフリーと{イブン・ハウカル}とムカッダシーの各前掲書は勿論、ヤークート *Yāqūt* (626 AH/1229年没) の『国々の辞典』*K. Muʿjam al-buldān*、イブン・アル＝アディーム *Ibn al-ʿAdīm* (660 AH/1262年没) の『アレppo史研究の望ましいもの』*K. Bughyat at-ṭalab fī taʾriḫ Ḥalab*、イブン・シャッターード *Ibn Shaddād* (684 AH/1285年没) の『シリアとジャズィーラの君主たちに関する極めて貴重な記述』*K. al-Aʿlāq al-khaṭīra fī dhikr umarāʾ ash-Shaʿm wa-l-Jazīra*、ディマシユキー *ad-Dimashqī* (727 AH/1327年没) の『陸と海との諸奇事に関する時代の精髓』

3) *Yql(I)* [p. 141] に、バルヒーがヒジュラ暦322年に87歳か88歳で亡くなったとあり、また *Yql(I)* [p. 143] に、バルヒーがシャームスティヤーン村に生まれたともある。

4) *Krachkovskiy* [p. 195] に従う。

5) この作品を、*de Goeje* (1871) [p. 49] はヒジュラ暦308年か309年、西暦920年か少し後に、*Krachkovskiy* [p. 195] はヒジュラ暦308-09年、西暦920-21年頃に著されたとする。『諸州の姿』という題名は *de Goeje* [p. 57]、両別名は *Krachkovskiy* [pp. 195-96] に従う。*IW* [p. 10] が『国々の調査表』*Taqwīm al-bilād* とするほか、*Ish* (1/2) はイブン・アル＝アディームに従って?、このバルヒーの作品を *Kitāb Ṣūrat al-arḍ wa-l-mudun* 『大地と諸都市の姿』[p. 298]、あるいは *Kitāb Ṣūrat al-arḍ* 『大地の姿』[p. 393] と呼んでいる。

6) *Mqd(a)* [p. 4]。

7) *de Goeje* [p. 42] は、イスタフリーの作品がバルヒーの作品の増補版で、バルヒーがまだ存命中の318 AH/930年と321 AH/933年との間にまとめられたと言う。また、*Maqbul Ahmad* (1995) [p. 76] は上のムカッダシーの言及(註6)から、バルヒーがイスラーム帝国の20の地図を描き、それらに簡単なコメントを付けたのではないかと言う。

K. Nukhbat ad-dahr fī 'ajā'ib al-barr wa-l-baḥr、ヌワイリー an-Nuwayrī (732 AH/1332 年没) の『人文学諸分野における必要の限度』*K. Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*、マクリーズィー al-Maqrīzī (845 AH/1442年没) の『新地と旧跡との陳述における警告と考慮』*K. al-Mawā'iz wa-l-i'tibār fī dhikr al-khiṭaṭ wa-l-āthār*、イブン・アル=ワルディー Ibn al-Wardī (861 AH/1457年没) の『諸奇事の生真珠と諸珍事の貴真珠』*K. Kharīdat al-'ajā'ib wa-farīdat al-gharā'ib*、イブン・アッ=シフナ Ibn ash-Shihna (890 AH/1485年没) の「アレppo Ḥalab 史」などに利用・引用されていると考えられる⁸⁾。そしてその利用・引用は、大地の広さやシリア ash-Sha'm とジャズィーラ al-Jazīra (上メソポタミア)〔とりわけ、両者の境界 *thughūr*〕の諸都市などに関する記述部分が多いようである⁹⁾。

なお、バルヒーのこの書がアブー・ジャアファル・ハーズィン Abū Ja'far al-Khāzin (Abū Ja'far Muḥammad b. al-Ḥasan al-Khurāsānī, 350 AH/961年以後没、サービア教徒の天文学者・数学者) の諸地図の説明に過ぎないという説もある¹⁰⁾。

イスタフリー、すなわちファールス Fāris のイスタフル Iṣṭakhr の人という名で知られるアブー・イスハーク・イブラーヒーム・ブン・ムハンマド・ファールスィー Abū Iṣḥāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Fārisī は、イスタフル出身のイラン系の人物と考えられる。バグダードのカルフ al-Karkh 地区に住んでいたことがあるようだ〔彼はカルヒー al-Karkhī という名でも知られる〕¹¹⁾が、少なくともアラブ al-'Arab の地 (アラビア半島)・イラーク al-'Irāq (下メソポタミア) 以東、マー・ワラー・アン=ナフル Mā warā' an-nahr (トランスオクシアナ) までのイスラーム圏を巡り歩いたらしい¹²⁾。そして340 AH/951年頃、『諸道と諸国』(別名『諸国の諸道』*K. Masālik al-mamālik*、『諸州』*K.*

8) 上記のヤークート以下の著作は、それぞれ本文中でバルヒーの地理書と明記したものを挙げている。なお、{ } で表示したのは、バルヒーの地理書と明記していないが、彼の書を直接あるいは間接的に利用・引用していると考えられる著作である。この { } での表示は、以下、ムカッダスィーの項まで同様である。

9) 大地の長さは Dm [p. 12]、Nw (I) [p. 209]、Mqr (I) [p. 10]、シリアとジャズィーラについては、イブン・アル=アディームの書 [Izz al-Dīn Ibn Ṣaddād, *Description de la Syrie du Nord*, tr. Anne-Marie Eddé-Terrasse, Damascus: Institut Français de Damas, 1984, tables 1-3] や Ish (I/2) [pp. 298, 305, 363, 367-69, 393] などにある。また、ヤークートの書 [YqM] では、アラビア [vol. II, p. 41, vol. IV, p. 146 (?)]、ファールス [vol. II, p. 122]、スィースターン [vol. IV, p. 73]、東ローマ [vol. I, p. 388] (?) に関する利用・引用が考えられる。

10) IN (I) [p. 138] や YqI (I) [pp. 142-43] は、バルヒーの著作の一つに、『アブー・ジャアファル・ハーズィンによる天界と世界の書の諸図の解説』なる書 *K. Taḥsīn shuwar Kitāb as-samā' wa-l-'ālam li-Abī Ja'far al-Khāzin* を挙げている。それで、Sprenger [pp. xiii-xiv] などは、バルヒーがアブー・ジャアファル・ハーズィンの地図に基づいたのではないかと推測し、Barthold [1937, p. xv, 18, note 5] も、バルヒーの地理書がこのハーズィンの諸地図の説明書に過ぎないかも知れないと言ったが、Krachkovskiy [p. 207] はこのハーズィンは350 AH/961年以後に没したと考えられ、バルヒーよりはるかに年下であり、Sprenger 以下の説は成り立たないと言う。なお、バルヒーの地理的著作と考えられるものには、『メッカが他地点に対して持つ長所』*K. Faḍā'il Makka 'alā sār'ir al-biqā'* [IN (I), p. 138; YqI (I), p. 143] や『バルフの長所』*K. Faḍā'il Balkh* [YqI (I), p. 143] もあるらしい。

11) Mqd (a) [p. 475]。

12) Miquel (1978) [p. 223] に従えば、イスタフリーはアラビア (少なくともメッカまで)、イラーク、フーゼスターン、ダイラム、マー・ワラー・アン=ナフルを訪れた。

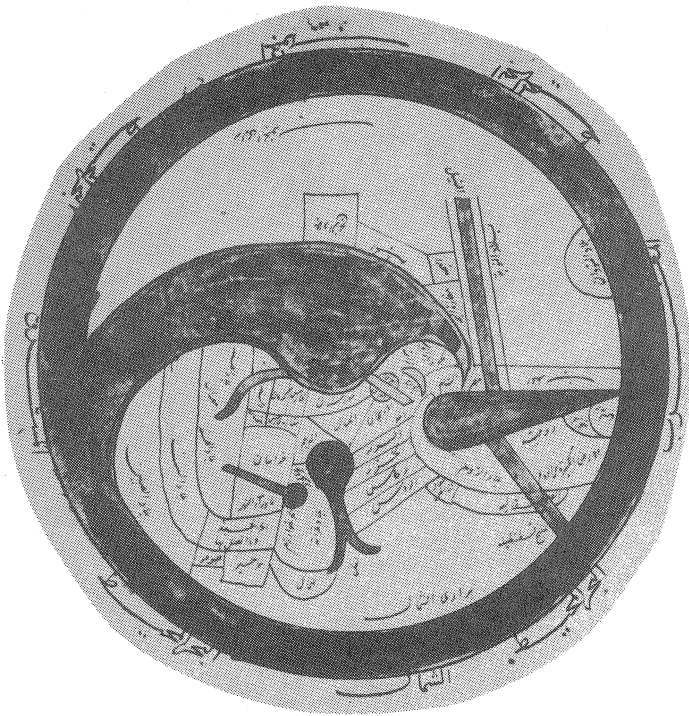
al-Aqālīm など) を著したとされる¹³⁾。

この書は序章、アラブの地、ファールスの海 (インド洋)、マグリブ *al-Maghrib* (北西アフリカ) [アンダルス *al-Andalus* (イベリア半島) を包含]、エジプト *Miṣr*、シリア、東ローマ *ar-Rūm* の海 (地中海)、ジャズィーラ、イラク、フーズスターン *Khūzistān*、ファールス、ケルマーン *Kirmān*、スィンド *as-Sind*、アルメニア *Armīniya* とアッラーン *ar-Rān* とアゼルバイジャン *Ādharbayjān* (まとめてザカフカース)、ジバル *al-Jibāl* (旧メディア)、ダイラム *ad-Daylam*、ハザル *al-Khazar* の海 (カスピ海)、ホラーサーンの沙漠 (カヴィール・ルート両沙漠)、スィースターン *Sijistān*、ホラーサーン、マー・ワラー・アン=ナフル [ホラズム *Khūwārazm* を包含] の21章からなり、各章に地図が配されている¹⁴⁾。内容は序章が世界の海洋と主な地域の紹介で、アラブの地の章以下は、それぞれがイクリーム (「州」) とされ、各々の境域、主な地方や都市、旅程などの記述となっており、故郷のファールスだけは、さらに風土・住民・財源といった項目の説明も見られる。そして地図は、序章が南を上にした円形の世界図で、海洋と島嶼と河川や各地域を描き、アラブの地の章以下は、長方形の各イクリームの図 [マー・ワラー・アン=ナフルだけは横長で他より2倍の大きさ、その他は縦長] で、諸境界や、街道と都市、山・河・海・島などの自然景観を示したものである。

この書のアラブの地の章以下は、すべてイスラーム圏を扱っており、これらが20「州・地方」イクリームに分けられているのは、前述したとおり、バルヒーの書に基づいていると考えられる。ここでは、ファールスの海、東ローマの海、ハザルの海が、いずれも「州」と見なされ、アルメニアとアッラーンとアゼルバイジャン、マグリブとアンダルスが、それぞれ1「州」として扱われ、ホラーサーンの沙漠も1「州」に数えられている。こうした「州・地方」イクリームによる居住地域の区分は、イランのケシュヴァル *keshvar* の影響を受けたものであり、プトレマイオス *Ptolemaeus* 系統の「気候帯」イクリームによる居住地域の区分より分かりやすく、以後、「諸道

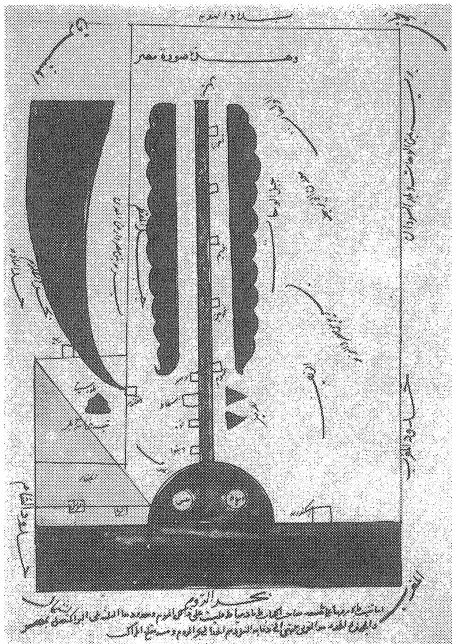
13) この地理書の執筆を、バルヒーの生存中の320AH/932年頃ではないかとする説 [Dunlop (1971), p.164] や、318-21AH/930-33年とする説 [Süsa (1974), p.159] もある。この地理書は『諸道と諸国』[Iṣ(a)] のほか、『諸国の諸道』[Iṣ(b)] あるいは『諸州』[Iṣ(c)]、さらには『諸形状』*Kitāb al-Ashkāl* [Iṣ(b), p.348] とも呼ばれている。写本としては、Iṣ(a) が基としたカイロ *Dār al-Kutub* 写本、地理 199、Iṣ(a) が利用したカイロの *Dār al-Kutub* 写本、地理 256 と 257、Iṣ(b) が基としたベルリンの *Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, MS. Sprenger I* (Ahlwardt 6032) (589AH/1193年筆写) とボローニャの *Biblioteca Universitaria, Cod. 3521* (589AH/1193年筆写)、Iṣ(b) が利用したライデンの *Bibliotheek der Rijksuniversiteit Cod.Or. 3101* (569AH/1173年筆写)、Iṣ(c) が基としたゴータ *Gotha der Forschungsbibliothek MS.Orient. Ar. 1521* (569AH/1173年筆写)、ほかがある。そして、Kramers (1932) [pp.14-15] は Iṣ(a) が基にする写本を、ほかよりも古いものとしてイスタフリー I とし、Iṣ(b) が基にした写本はテキストがより完全だが、イスタフリー I より後のものとしてイスタフリー II とする。なお、イスタフリーはこの書とは別に、ファールスに関する小作品も著したようだ [Iṣ(a), p.67]。

14) Iṣ(a), pp.15-192. cf. Iṣ(b), pp.2-348. なお、Iṣ(c) はイスタフリーの全編ではないが、pp.2-126. また、Iṣ(b) には地図が全く付いておらず、Iṣ(c) はエジプト以降だけに地図が付いている。現存するライデン写本 (Or. 3101) の地図は彩色されており、本来の地図も彩色されていたのではないかと考えられる。ちなみに、Iṣ(a) も Iṣ(c) も単色刷りの地図である。また、テキストの内容が Iṣ(c) は多少異なる。なお、イスタフリーのこの書の欧米語訳には、Iṣ(c) の独訳 Iṣ(d) や、ベルシア語テキストからの W. Ouseley による英訳 (下記の註19) がある。



① イスタフリーの世界図 (カイロ写本 地理 256) :

円形の大地を「周海」が取り巻き、2大海が東と西から中央へ向かって大地に湾入する。東 (左) が「ファールス海」(インド洋) で、その先端 (鳥の嘴形) は「クルズム al-Qulzum 海」(紅海)。そしてこの大海に、東北 (左斜め下) 方向から「ミフラーン Mihrān 川」(インダス川)、西北 (右斜め下) 方向から「ティグリス Dijla 川」が注ぐ。他方、西 (右) 側の大海は「東ローマ海」(地中海) で、この海に南 (上) から流れ込むのが「ナイル an-Nīl 川」、北 (下) でつながっているのが「コンスタンティノーブル al-Qusṭanṭīniya 海峡」(ボスボラス海峡)。また、内陸に描かれた2つの円と帯は、右の大きい方が「ハザル海」(カスピ海) と「アティル Atīl 川」(ボルガ川)、その左横の小さい方が「ホラズム海」(アラル海) と「バルフ川」あるいは「ジャイフーン Jayhūn 川」(共にアム川)。



② イスタフリーのエジプト図 (カイロ写本 地理 256) :

南が上で、中央を上下に真直ぐ貫くのが「ナイル川」。下流の半円形はデルタで、その下は「東ローマ海」。また、「ナイル川」のそれぞれ、左 (すなわち東) 側の連なりが「ムカッタム al-Muqaṭṭam 山」、右側の連なりが「諸オアシス al-Wāḥāt 山」で、その下の2つの三角はピラミッド。さらに、この図の左端上方から入り込むのが「クルズム海」で、その下は「シナイ山 Ṭūr Sīnā」。

と諸国の学」ではこの「州・地方」イクリームの方が多く用いられる¹⁵⁾。

そして地図も、バルヒーに拠っているのだろうが、プトレマイオス系統の地図に見られるような投影法や縮尺や経緯度を用いたものではない。島や湖(内海)が円、街道が直線、都市がアラブの地以西では四角形、シリア以东では五角形(テント形)など、河川が平行線といった幾何学的な図形でそれぞれ表現された、かなり模式化された図であり、サーサーン朝ペルシア時代の地図の影響を受けたものだというのが通説である¹⁶⁾。世界図は、大地を「周海」が取巻くというギリシア以来の概念に基づき、クルアーンの2大海説に合わせて、その「周海」からファールスの海と東ローマの海とが湾入する構図になっている¹⁷⁾。また各「州」図は、道案内図(路程図)と言ってよいもので、これらの地図の目的が、距離・方位の正確な表現ではなく、都市・街道などの位相関係の表現であったことを窺わせる¹⁸⁾。

イスタフリーの書は結局のところ、バルヒーの作品を骨格にして、自らの旅行で集めた資料によって肉付けした作品と考えられ、かなり体系的な地誌となっている。しかし、依然として諸地図に対する解説書の域を出ていないと言い得る。

その後、イスタフリーの『諸道と諸国』は特にペルシア語世界で評判を博する¹⁹⁾が、アラビア語作品においては、イブン・ハウカルとムカッダシーの各前掲書は勿論、{バクリー al-Bakrī (487 AH/1094年没) の『諸道と諸国』 *K. al-Masālik wa-l-mamālik*}、ヤークートとイブン・アル=アディームの各前掲書、カズウィーニー al-Qazwīnī (682 AH/1283年没) の『諸国の古跡と信者の情報』(以下、『諸国の古跡』と略記) *K. Āthār al-bilād wa-akhbār al-ibād* と『被造物の諸奇事と存在物の諸珍事』 *K. ‘Ajā’ib al-makhlūqāt wa-gharā’ib al-mawjūdāt*、{アブ・ル=フィダー Abū l-Fidā’ (732 AH/1331年没) の『国々の調査表』 *K. Taqwīm al-buldān*}、{カルカシャンディー al-Qalqashandī (821 AH/1418年没) の『作文術における夜盲の朝』 *K. Ṣubḥ al-‘āshā fi*

15) 「諸道と諸国の学」に属するイドリースーは「気候帯」イクリームを使う。また、数理・天文地理学の「経度と緯度の学」は専ら「気候帯」イクリームを使う。イクリームの様々な用法については、竹田(1983) [pp. 78-81] 参照。そしてイランの影響については、Kramers (1954 a) [pp. 153-56] 参照。

16) Kramers (1936) [p. 65]、Krachkovskiy [p. 206]。

17) 周海(オケアノス)の概念は、イスラーム世界にはプトレマイオス(168年頃没)を通じて入ってきたのかも知れないが、ギリシアでは彼以前のホメロス Homerus (前8世紀頃) やヘカタイオス Hecataeus (前475年頃没) などにすでに見られる。2大海説はクルアーン25章53節。

18) Tibbetts は、これらの地図の基本的な目的は、その州を通る隊商路(諸街道)のすべての宿駅に印を付けながら、それらの隊商路を組み入れることであるように見えると言う [p. 115]。また、こうした地図は、他のいかなる実用的な利用よりもむしろ、記憶を助けるような目的のために描かれたように見えるとも言う [p. 120]。

19) ペルシア語の翻訳としては、5 AH/11世紀か6 AH/12世紀と考えられる作品 [*Masālik va Mamālik, ta’līf-i Abū Ishāq Ibrāhīm Iṣṭakhrī*, ed. Īraj Afshār, Tehran: Bungāh-i Tarjumah va Nashr-i Kitāb, 1347 AH/1969] — テヘランの Mūzah-i Īrān-i Bāstān, MS. 3515 (726 AH/1325年筆写) に基づく — や、W. Ouseley が英訳した *Ṣuwar al-buldān* というペルシア語テキスト [*The Oriental Geography of Ebn Haukal*, London, 1800] — オックスフォードの Bodleian Library, MS. Ouseley 373 (670 AH/1272年筆写) に基づく — ほかがあり、10世紀の匿名の著者によるペルシア語の地理書『世界の諸境界』 *Hudūd al-‘ālam* もイスタフリーの『諸道と諸国』を利用している。また、地図もペルシア語世界で評判になる。

ṣināʿat al-inshāʿ}, イブン・アル=ワルディーの前掲書、{ヒムヤリー *al-Ḥimyarī* (900 AH / 1494年没) の『国々の情報に関する香しい庭園』 *K. ar-Rawḍ al-miʿtār fī khabar al-aqtār*} などに利用・引用される。そしてその利用・引用は、バクリー以降の作品においては、ファールス、マー・ワラー・アン=ナフル、ホラーサーン、シンド、アルメニア・アッラーン・アゼルバイジャン、アラブの地などに関する部分が多いが、実はイスタフリーの書の全体に及んでいると考えられる²⁰⁾。

イブン・ハウカルの名で知られるアブ・ル=カースィム・ムハンマド・ブン・アリー *Abū ʿl-Qāsim Muḥammad b. ʿAlī* は、ジャズィーラのナスィービー (ニシビス) *Naṣībī* 出身 [彼はナスィービー *an-Naṣībī* と呼ばれる] ではないかと考えられる²¹⁾。若い頃から地理学に関心を持ち、331 AH / 943年にバグダードを旅立って以来、商売をしながら、東はマー・ワラー・アン=ナフルから西はマグリブ・アンダルス・シチリア *Ṣiqillīya* までイスラーム圏のほぼ全域を巡り歩き²²⁾、ファーティマ朝のエジプトを訪問後はイスマーイール派の宣教師 *dāʿī* になったとも言われる²³⁾。そして、こうした諸国遍歴の途中、上述のイスタフリーに会い、その書の誤謬を直すよう頼

20) これは *Kamal* (1930) [fasc. I, p. 136] がすでに指摘したことであるが、アブ・ル=フィダーの書 [AF] に頻繁に登場する「イブン・ハウカルが言った」[pp. 43, 44, 58, 59, 60 ほか] や「イブン・ハウカルから」[pp. 44, 60, 283, 289, 503] などという部分は、実はイスタフリーの書からの引用であり、このアブ・ル=フィダーによる引用だけで、イスタフリーの書の全体に及ぶ。また、カルカシャンディーの書 [QI] に関しても多くの場合、同様の可能性が考えられる [vol. III, p. 382, vol. IV, pp. 77, 89, 113, 122 ほか]。アブ・ル=フィダーの書を除外すると、例えば、ヤークートの書 [YqM] だけでも、ファールス [vol. I, pp. 194, 791, vol. II, pp. 64, 122, 147 ほか]、マー・ワラー・アン=ナフル [vol. I, pp. 238, 277, 594, 611, 744 ほか]、ホラーサーン [vol. I, p. 528, vol. II, p. 404, vol. III, pp. 491, 518, 785 ほか]、アルメニア・アッラーン・アゼルバイジャン [vol. I, pp. 239, 437, 558, 563, vol. II, p. 474 ほか]、ジバル [vol. II, p. 894, vol. III, pp. 53, 443, vol. IV, pp. 175, 381]、スイスターン [vol. II, pp. 541, 737, vol. III, pp. 41, 364, vol. IV, p. 992] ほかの非アラブ圏全域で、諸都市などに関する部分の利用・引用が複数回見られ、そのほかアラブの地 [vol. II, pp. 208, 285] などに関する部分の利用・引用もある。また、カズウィーニーの書 [Qz] では、ファールス [pp. 148, 181, 188, 244]、マー・ワラー・アン=ナフル [pp. 538, 554, 558, 603]、アラブの地 [pp. 61, 90, 101]、シンド [pp. 95, 121, 125]、シリア [p. 205]、ホラーサーン [p. 426] に関する部分の利用・引用が見られる。そして、*Leeuwen & Ferre* (1992) (introduction, p. 22) は、バクリーのこの作品がイスタフリーとイブン・ハウカルとの書のシンド、ケルマーン、ホラーサーンの部分を利用したと言う。なお、{ } で括ったヒムヤリーの書の利用は、イブン・ハウカルに関しても同様だが、*Muʿnis* [p. 538] の見解に従ったものである。

21) *Krachkovskiy* [p. 198] の説。その他、バグダード出身説 [*Ḥamīda* (1969), p. 174; *Süsa*, p. 170] もある。また、*YqM* [vol. I, p. 375] は彼を「モースルの商人 (*at-tājir al-Mawṣilī*)」としている。

22) イブン・ハウカルは自著 [IH(a)] の中で、彼が320 AH / 932年にイラクの *al-Madāʾin* におり [p. 245]、331 AH / 943年にバグダードを出発 [p. 3]、336 AH / 947年にマグリブの *al-Mahdīya* [p. 71]、337 AH / 948年にアンダルス [p. 108]、340 AH / 951年にマグリブの *Sijilmāsa* [pp. 83, 99]、そこから南方の *Awdaghust* [pp. 61, 99]、344 AH / 955年にアルメニア・アゼルバイジャン・アッラーン [p. 354]、350 AH / 961年にイラクの *al-Baṣra* [p. 290] やファールス [p. 304]、358 AH / 969年にハザルの海の東の *Jurjān* [p. 393]、同年にジャズィーラのナスィービー [p. 214] とモースル [p. 217]、イラクの *al-Baṣra* [p. 239] と *Wāsiṭ* [p. 239] と *al-Kūfa* [p. 240]、フーゼスターン [p. 259]、さらにマー・ワラー・アン=ナフル [p. 15]、361-62 AH / 972-73年にシチリア [pp. 26, 128] を訪れたと言っている。また、アラブの地の *al-Baḥrayn* や *al-Aḥṣāʾ* を訪れた時、かの地はカルマト派の支配下にあったと言う [p. 25]。

23) *Dozy* (1861) [vol. III, pp. 17, 21, 181-82] は、イブン・ハウカルがファーティマ朝のためにアンダルスで諜報活動をしたと見る。

まれたらしい²⁴⁾。その結果、イブン・ハウカルは356AH/967年以前に彼の『諸道と諸国』を脱稿し、アレppoのハムダーン朝の君主サイフ・アッ=ダウラ Sayf ad-Dawla (在位333~56AH/945~67年) に献じたと言われる²⁵⁾。その後、別人に献じるためか、367AH/977年頃と378AH/988年頃の2度にわたり手を加えて、最終的には『大地の姿』という題名の作品を完成させたと考えられる²⁶⁾。

イブン・ハウカル『大地の姿』は、序章〔+大地の姿 (形状)〕、アラブの地、ファールスの海、マグリブ〔+アンダルス+シチリア〕、エジプト、シリア、東ローマの海、ジャズィーラ、イラーク、フーゼスターン、ファールス、ケルマーン、スインド、アルメニアとアゼルバイジャンとアッラーン、ジバル、ダイラムとタバリストーン Ṭabaristān、ハザルの海、ホラーサーンとファールスとの沙漠、スイースターン、ホラーサーン、マー・ワラー・アン=ナフル、結章からなり、結章を除く各章には地図が挿入されている²⁷⁾。そして、序章は世界全体を紹介し、アラブの地の章以下は、それぞれの境域と地図の説明に始まり、主な地方や都市、旅程、収税などを記述する。また地図は、序章が円形の世界図で、海洋と河川や各地域を描き、アラブの地の章以下は20「州」の長方形〔マグリブとエジプトとホラーサーンとマー・ワラー・アン=ナフルは横長で他より2倍大、その他は縦長〕図で、いずれも諸境界や、都市と街道、山・河・海・島といった自然景観を示したもので、やはり幾何学的な図形での表現になっている。

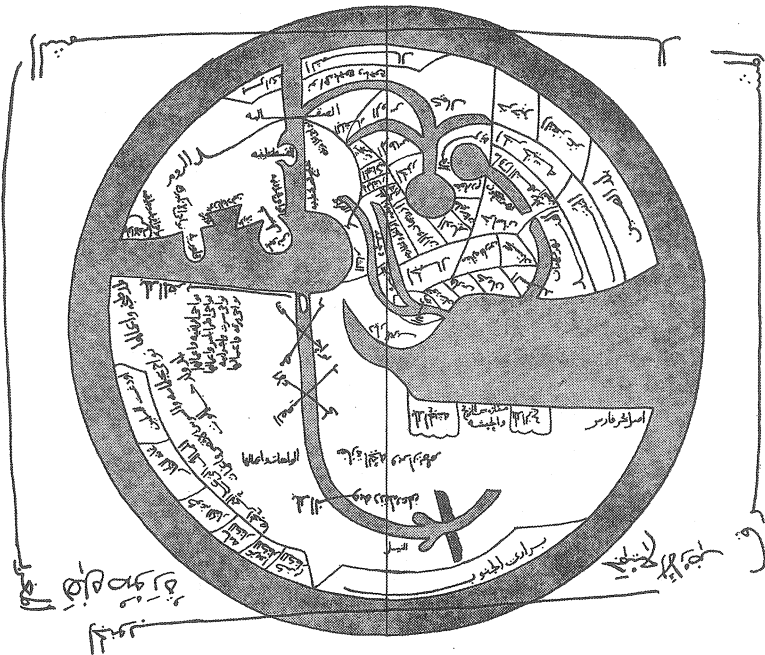
この書は一見すると、イスタフリーの書の記述をほぼ踏襲している印象が否めない。しかし、マグリブ・アンダルス・シチリアの記述はほとんどが独自のものであり、エジプト、東ローマの海、ジャズィーラ、マー・ワラー・アン=ナフルなどに関しても、自らの旅行と観察に基づいた記述は単なる修正を越えたものがあり、これらの章はイスタフリーの書に比べると大幅な増量となっている。そして、全体的に経済関係の情報の優れていることが目立つ。また地図も、マグリブ・アンダルス、エジプト、東ローマの海、ファールスの海は大いに改良された詳しいものになっている。その他の「州」は、河川の支流、山などに新たなものが加わり、やや詳しく

24) イブン・ハウカルはスインドの章の最後で、イスタフリーとの出会いを記すが、スインドで会ったとは言っていない〔IH(a), p. 329〕。Krachkovskiy [p. 198] は両者の出会いを340AH/951-52年と考える。そして Kramers & Wiet [IH(c), vol. I, p. x] はスインドで会ったと考え、al-Hīnī [Iš(a), p. 9] は325AHにバグダードで会ったと考える。

25) 『諸道と諸国』というタイトルは IH(b)で、サイフ・アッ=ダウラへの献呈は IH(b) [p. 4—パリの Bibliothèque Nationale, MS. Arabe 2214 による—]。

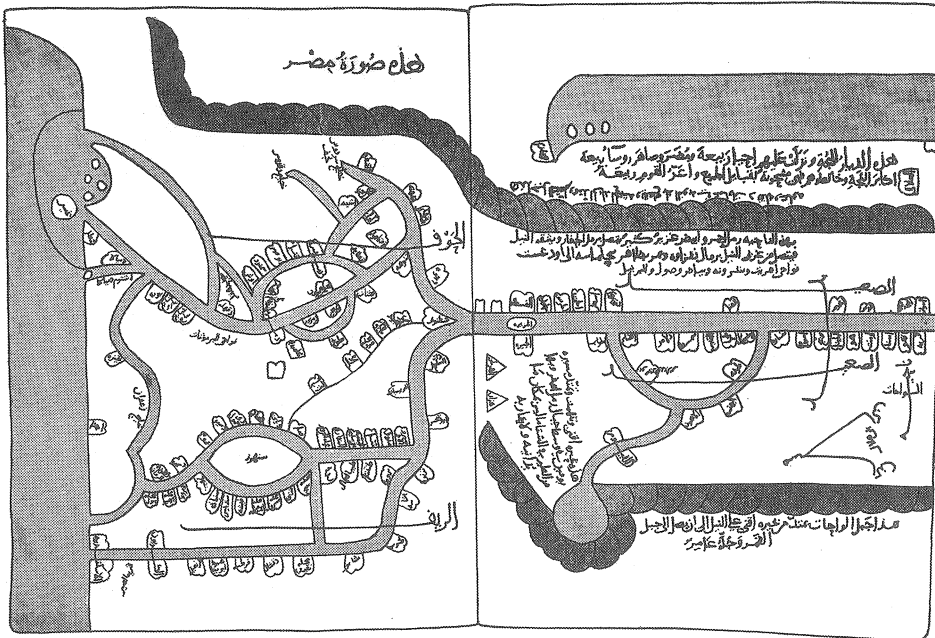
26) 2度の修正は Miquel (1971) [p. 787] に従う。IH(a) [p. 2] は、Abū 's-Sarī al-Ḥasan b. al-Faql b. Abī 's-Sarī al-Iṣbahānī に献呈とある。なお、イブン・ハウカルはシチリアに関する作品も著したようだ〔IH(a) pp. 120, 129〕。

27) IH(a), pp. 1-528. cf. IH(b), pp. 1-406. IH(a) はイスタンブールの Topkapi Sarayı Müzesi Kütüphanesi, A. 3346 (479AH/1086年筆写) に基づいたもので、IH(b)—ライデンの Bibliotheek der Rijksuniversiteit, Cod. Or. 314 (725AH/1325年筆写?) とオックスフォードの Bodleian Library, MS. Huntington 538 (筆写年代不詳) に基づき、パリの Bibliothèque Nationale, MS. Arabe 2214 (849AH/1445年筆写?) (註25と28参照) も利用したもの—よりも古くかつ詳しい。なお、欧米語による全訳には、前記 (註24) の IH(c) という仏訳がある。



③ イブン・ハウカルの世界図 (イスタンブール写本 A. 3346) :

図の中央に「アラブの地」(アラビア半島) が来ている。そして、イスタフリーの図 ① と異なり、プトレマイオスの影響で、「ナイル川」の上流 (左上) に「月の山」が描かれている。また、「イラーク」(下メソポタミア) で「ティグリス川」に合流する「ユーフラテス al-Furāt 川」も描かれ、「ハザル海」の下では川が3つに分かれている。



④ イブン・ハウカルのエジプト図 (イスタンブール写本 A. 3346) :

東が上で、特に「ナイル川」が詳しく描かれている。図の中ほどに、中洲 (ロード島) が見られ、川の東岸が「フスタート (旧カイロ) al-Fuṣṭāṭ」、西岸が「ギーザ al-Jīza」となっている。そして川は、その先 (北) で2つに分かれ、5つの河口を持っている。また、西側の「諸オアシス山」の北の始まりは、円形で示された「Aqnā (?) と Tanhamat (?) との湖 (カールーン湖)」と書かれている。

なっているが、いずれの「州」もその全体的な形状は、アラブの地を除いてあまり変わっていない。イブン・ハウカルは自分の描いた地図そのものについて詳しく述べる部分をテキストに加え、そのために地図の主体性が薄れて、地図がテキストに主役を譲ることになってしまった。

つまり、イブン・ハウカルは旧サーサーン朝ペルシア領域に関する記述は基本的にイスタフリーに依拠しているが、それより西方の地域に関しては自らの旅行で得た情報を十分に活用した作品であり、イスタフリーの書よりも大部の詳しいイスラーム圏地誌となっている。

そして、イスタフリーがアラビア語に多少の難があったこともあり、アラビア語世界ではイブン・ハウカルは『大地の姿』や『諸道と諸国』の方がより評判を博し²⁸⁾、ムハッラビー al-Muhallabī (380 AH/990年没) の『諸道と諸国』、{ムカッダシーとバクリーの各前掲書}、イドリースィー al-Idrīsī (560 AH/1165年没) の『諸国踏破を熱望する者の楽しみ』 *K. Nuzhat al-mushtāq fī ikhtirāq al-āfāq*、ヤークートの前掲書、アブドゥッラティーフ・バグダーディー ‘Abd al-Laṭīf al-Baġhdādī (629 AH/1231-32年没) の『エジプトの地で目撃された事柄と体験された出来事に関する情報と考察』 *K. al-lfāda wa-l-iftibār fī l-umūr al-mushāhada wa-l-ḥawādith al-mu‘āyana bi-arḍ Miṣr*、スィプト・ブン・アル=ジャウズィー Sibṭ b. al-Jawzī (654 AH/1256年没) の『名士たちの歴史に関する時代の鏡』 *K. Mir‘āt az-zamān fī ta’rīkh al-a‘yān*、イブン・サイード Ibn Sa‘īd (673 AH/1274年没) の『7気候帯に関する地理』 *K. al-Juġhrāfiyā fī l-aqālīm as-sab‘a*、イブン・アル=アディームの前掲書、カズウィーニーの『諸国の古跡』、イブン・シャッダードの前掲書、ワトワート al-Waṭwāt (718 AH/1318年没) の『思考の喜びと考慮の方法』 *K. Mabāhij al-fikr wa-manāhij al-‘ibar*、ディマシュキーとアブ・ル=フィダーとヌワイリーの各前掲書、イブン・アッ=ダワーダーリー Ibn ad-Dawādārī (741 AH/1340年没) の『真珠の宝庫と精粹の集成』 *K. Kanz ad-durar wa-jāmi‘ al-ghurar*、ウマリー al-‘Umarī (749 AH/1349年没) の『大都市を持つ諸王国についての洞察の道筋』 *K. Masālik al-abṣār fī mamālik al-amṣār*、イブン・ハルドゥーン Ibn Khaldūn (808 AH/1406年没) の『実例の書』 *K. al-‘Ibar*…、イブン・ドゥクマーク Ibn Duqmāq (810 AH/1407年没) の『諸都市の中心への左祖』 *K. al-Intiṣār li-wāsiyat ‘iqd al-amṣār*、カルカシャンディーとマクリーズィーとイブン・アッ=シフナと {ヒムヤリー} の各前掲書、イブン・マージド Ibn Mājid (906 AH/1500年頃没) の『航海学の原理と基礎に関する有益な事柄』 *K. al-Fawā'id fī uṣūl ‘ilm al-baḥr wa-l-qawā'id* などに、利用・引用される。またその利用・引用も、マグリブとアンダルス、エジプトが圧倒的に多く、次に大地の姿 (形状) や、シチリア、シリアなどが多く、名目上はイブン・ハウカルは書全体に及んでいる²⁹⁾。

28) 534-80 AH/1139-84年頃に、その要約がアラビア語で著されている—— 上記 (註27) のパリ写本 Arabe 2214——。これはプトレマイオスに基づくフワーラズミー al-Khuwārazmī (236 AH/850年頃没) によるナイル流域の1葉の地図を含む。

29) 利用・引用がイブン・ハウカルは書の全体に及ぶとされるアブ・ル=フィダーとカルカシャンディー (註20参照) を除外しても、例えば、イドリースィーの書 [Id] では、エジプト [pp. 40,

ムカッダスィー al-Muqaddasī あるいはマクディスィー al-Maqdisī、すなわち「聖なる家」al-Bayt al-muqaddas あるいは Bayt al-maqdis と呼ばれるエルサレムの人という名で知られるアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・ブン・アフマド・ブン・アブー・バクル・バッシヤーリー Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Aḥmad b. Abī Bakr al-Bashshārī は、335 AH/946-47年にエルサレムに生まれたらしい³⁰⁾。356 AH/967年にメッカ大巡礼を行なって以来、イスラーム圏各地を様々な職業〔ある時期からはイスマール派の宣教師?〕に就きながら巡り歩いた³¹⁾。ただし、アンダルス全域と、スィースターンとスィンドの大部分、イエメンの一部だけは足を踏み入れなかったようである³²⁾。そして375 AH/985年、『諸州の知識に関する最良の区分』という地理書を著し、サーマーン朝に献じ、その3年後、それに手を加えたものを今度はファールティマ朝に献じたらしい³³⁾。

この書は前書き、海洋と河川、名前とその相違、諸州の特色、諸法学派と庇護民、私の体験事、意見の異なる諸所、法学者のための要約【各県都とその都市圏】、世界の7「気候帯」と礼拝の方向、イスラーム帝国、アラブの島州、イラク州、アクル al-Aqūr (=ジャズィーラ) 州、シリア州、エジプト州、マグリブ〔アンダルスを含む〕州、アラブ〔諸州間〕の荒野 (シリア沙漠)、マシュリク al-Mashriq (=マール・ワラー・アン=ナフルとホラーサーンとスィースターン) 州、ダイラム州、リハーブ ar-Rihāb (=アゼルバイジャンとアッラーンとアルメニア) 州、ジバール州、フーゼスターン州、ファールス州、ケルマーン州、スィンド州、これら非アラブ al-‘Ajam 諸州間の

323, 343]、ホラーサーン [pp. 476, 488] を始め、大地の形状 [p. 831]・ルース ar-Rūs [pp. 917, 918]、マグリブ [p. 226]、フーゼスターン [p. 395]、スィンド [p. 177]、アゼルバイジャン [p. 680]、ハザル海 [p. 831]、ヤークートの書 [YqM] では、頻繁にマグリブ [vol. I, pp. 235, 320, 338, 399, 407 ほか] とアンダルス [vol. I, pp. 195, 224, 275, 279, 375 ほか]、それにシチリア [vol. I, p. 719, vol. II, p. 391, vol. III, p. 409, vol. IV, p. 167]、スィプトの書 [Sb(I)] では、大地の形状 [pp. 61, 97]、エジプト [pp. 79, 100] を始め、アンダルス [p. 104]、シリア [p. 92]、東ローマ海 [p. 100]、ジャズィーラ [p. 95]、ハザル海 [pp. 118-19]、といった部分に関する利用・引用が見られる。

30) Mqd(a) [pp. 8-9] に、彼が40歳に達した時に地理書を完成し、それが375 AH とある。

31) 様々な職業は Mqd(a) [pp. 43-44]。イスマール派の宣教師説は Collins [Mqd(d), p. xxi] で、下記の註33も参照。

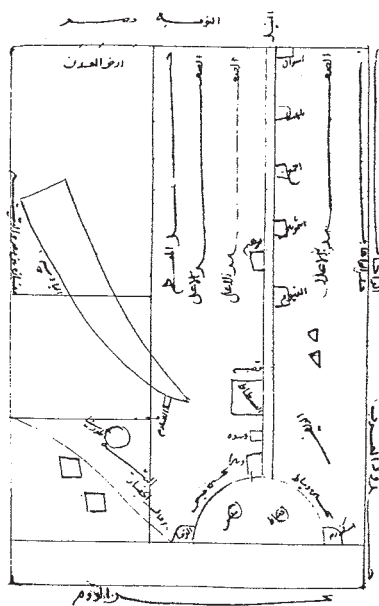
32) 彼の旅行中の足取りについては、現状では自著 [Mqd(a)] の中からしか推測できないが、具体的な言及は、356 AH/967年 [p. 101] と367 AH/978年 [p. 101] と377 AH/987年 [p. 223i] との3回のメッカ大巡礼、366 AH/977年以後のファールスの Sīrāf 訪問 [p. 426]、374 AH/984年のホラーサーンの Sarakhs 訪問 [p. 65 k]、1年間のイエメン滞在 [p. 88]、4ヶ月のダイラム滞在 [p. 370]、1日のフーゼスターンの ‘Askar Mukram 滞在 [p. 410]、2回以上のシリア沙漠横断 [p. 248]、アラビア半島周航 [p. 10] くらいである。なお、アンダルスは全く訪れず [p. 222]、スィンドは内部に入らず [p. 475]、イエメンも全部は行かなかった [p. 88] らしい。また、スィースターンについては彼の記述が少ない [p. 297]。

33) 上記の註30の執筆は、Mqd(a) [p. 9] に、ファールス州都 (Shīrāz) でとあり、この375 AH 版 (イスタンブールの Süleymaniye Kütüphanesi, Aya Sofya No. 2971 bis — 以下、イスタンブール写本と略記 —) は、直接にはサーマーン朝の法官 Abū ‘l-Ḥasan ‘Alī b. al-Ḥasan に献呈している [Mqd(a), pp. 8, 8d, 66k]。また、YqM [vol. I, p. 653] が378AH と言っている版 (ベルリンの Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, MS. Sprenger 5 (Ahlwardt No. 6034) — 以下、ベルリン写本と略記 —) は、ファールティマ朝賛美の記述 [Mqd(a), p. 212] などを含み、ファールティマ朝へ献上されたというのが通説である。なお、イスタンブール写本では、書名が単に Kitāb al-Aqālīm 『諸州の書』とも呼ばれている。

沙漠 (イラン大沙漠) からなる³⁴⁾。前書きからイスラーム帝国までが、いわば序論であり、全体の $\frac{1}{6}$ 弱の量を占めている。アラブの島州以下が本論であり、各州ごとに概要【特徴、土地区分、主要都市の概観など】と諸事情【風土と特異集団、宗派と法学派とクルアーン読誦の流派、言語、交易、特産、度量衡と通貨、風習、水、鉱物、霊場、奇事、統治、租税など、最後に道程】が記される。

そして少なくとも、各州の特徴の後には彩色の地図が付いていたと考えられる³⁵⁾が、今回利用できた、いわゆるベルリン写本の地図では、従来のイスラーム帝国 20「州」区分のままであり、世界図、ハザルの海の図、ホラーサーン{とファールスと}の沙漠の図、スィースターンの図が欠けており、新たにカアバ (すなわち、キブラ) の図とアラブの荒野の図が加わった、計 19葉の地図となっている³⁶⁾。そして、その表示の内容も形式も基本的にイスタフリー、イブン・ハウカルのそれらと同様である³⁷⁾。

ムカッダシーは、それまでイスラーム圏の中でアラブ地域はアラブの地、マグリブ、エジプト、シリア、ジャズィーラ、イラークという 6「州」だったが、新たにアラブ諸州間の荒野を加え〔ただし、「州」扱いはしない〕、逆に非アラブ地域は、従来のマー・ワラー・アン=ナフルとホラーサーンとスィースターンという 3「州」をまとめてマ



⑤ ムカッダシーのエジプト図 (ベルリン写本 Sprenger5) :

イスタフリーの図②と基本的に同じだが、「ナイル川」の位置がより右へずれ、「ムカッタム山」と「諸オアシス山」とが単に文字で表示されている。

34) Mqd(a), pp. 1-498. ベルリン写本 (900 AH/1494年筆写) に基づき、イスタンブール写本 (658 AH/1260年筆写) も利用したテキストである。欧米語による全訳としては、Mqd(d) という英訳、部分訳としては Mqd(b) という英訳や Mqd(c) という仏訳などがある。

35) Mqd(a) [p. 9] に、街道を赤色、砂地を黄色、海洋を緑色、河川を青色、山地を茶褐色で描いたとある。

36) 現存する写本の地図は、少なくとも2種類あり、今回は利用できなかったもう1種の、イスタンブール写本の地図を、筆者はまだ検討しておらず、今後の課題である。なお、Miller (1927-29) [tables 6, 8, 15, 18, 20, 21, 27, 30, 33, 36, 39, 51, 58] が載せるライデン写本、すなわち Bibliotheek der Rijksuniversiteit, Cod. Or. 2063 (1255-56 AH/1840年筆写) の地図 (15葉?) は、上記のイスタンブール写本の写しと考えられ [Tibbetts, pp. 122, 134]、この地図を見る限りでは、イスタンブール写本の方がベルリン写本よりもテキストに近いように思われる。

37) なお、3人の比較の例として都市の表わし方を挙げてみる。イスタフリーに関しては既述したが、イブン・ハウカルにおいては二瘤や三瘤の方形で表わす。そして、ムカッダシーにおいてはその都市の重要性の違いに応じて、ベルリン写本では単なる方形の、Miller (前註36 参照) が載せるライデン写本では多重円の、それぞれ大きさが異なるものとなっている。

シュリクという1「州」とし、非アラブ諸州間の沙漠を「州」扱いから外す。そしてファールスの海、東ローマの海、ハザルの海を海域なので地域から外す結果、非アラブ地域は、従来の11~13・14「州」から8「州」に整理される。

他方、地図はベルリン写本で見る限りは、イスタフリーとイブン・ハウカルの地図よりも総じて簡単なものである³⁸⁾。これはムカッダスィーがイスタフリーとイブン・ハウカル以上にテキストを詳しくしたため、地図の役割がさらに小さくなってしまったことを意味するのではなかろうか。

ムカッダスィーの書は、彼自身が言うとおりの、自らの観察結果を拠り所とし、足らない部分だけを先人たちの書物や信頼の置ける人物たちからの情報で補おうとした作品である³⁹⁾。そして、内容が「バルヒー学派」のそれまでの書よりも多項目にわたり、より体系立った、きわめて優れた地誌となっている。

以後、『諸州の知識に関する最良の区分』を凌駕するイスラーム圏地誌は現れなかったと言い得るが、残念ながら、{?バクリーの『難解地名辞典』*K. Mu'jam mā 'sta'jam*}、ヤークートの前掲書とカズウィーニーの『諸国の古跡』、ムジール・アッ=ディーン・ウライミー *Mujīr ad-Dīn al-'Ulaymī* (928AH/1522年没) の『エルサレムとヘブロンとの歴史に関する大きな喜び』*K. al-Uns al-jalīl fī ta'rikh al-Quds wa-'l-Khalīl* ぐらいしか、この書を利用・引用したことがはっきりせず、その利用・引用はアラブの島、シリア、マシュリク、ファールス、ケルマーンなどに関してが多い⁴⁰⁾。

(III)

「バルヒー学派」の作品に共通して見られる点は、記述の対象地域を居住世界全体ではなくイスラーム圏に限定すること、理論上の「気候帯」イクリームに代わり実際の「州」イクリームによって区分すること、各「州」ごとに地図を配置すること、そして、イスタフリー以下はいずれもイスラーム圏各地を旅行して集めたデータを活用した体系的な地誌を書き上げたこと、などである。

このイスラーム圏だけの記述、しかも当時の政治・文化の中心地イラクではなく宗教上の中心地アラビアから記述を始めること、クルアーンに従った2大海の描写が世界地図に見られることなどは、この学派のイスラーム的色彩の濃さを感じさせ

38) Miller (1926-29) [tables 4, 6, 8, 10, 11, 15, 18, 20, 21, 24, 27, 30, 33, 36, 39, 42, 45, 51, 58, 63] を見る限りでは、ベルリン写本とライデン (=イスタンブール) 写本の両方とも、地図は詳しくない。

39) ムカッダスィー自身の言は、Mqd(a), pp. 3, 43.

40) ヤークートの書 [Yq M] による利用・引用が最も多く、アラブの島 [vol. II, p. 245, vol. III, p. 646, vol. IV, pp. 279, 588, 643]、シリア [vol. I, p. 779, vol. II, p. 818, vol. III, pp. 25, 125, 397 ほか]、マシュリク [vol. I, pp. 528, 746, vol. II, pp. 483, 573, 804 ほか]、ファールス [vol. I, pp. 195, 199, vol. II, pp. 560, 576, 821 ほか]、ケルマーン [vol. II, pp. 633, 830, vol. III, p. 213, vol. IV, pp. 148, 264 など] のほか、イラク [vol. II, p. 393, vol. III, pp. 15, 915]、エジプト [vol. IV, pp. 160, 602]、マグリブ [vol. I, p. 653]、フーゼスターン [vol. II, p. 575] の、計9州に及んでいる。次に多いのがムジール・アッ=ディーンの書で、すべてシリアに関してである [Mqd(c), pp. 199, 201, 202]。また、カズウィーニーの書 [Qz] による利用・引用がシリア [p. 93] とマシュリク [p. 306] とファールス [p. 200] に関して見られる。最後に { } と?付きだが、バクリーの書 [Bk(I)] による、シリアの Wayla (Ayfa) [p. 135] に関する引用の可能性もある。

る。次に、アンダルスを独立した「州」として取り扱わず、マグリブ「州」に入れて記述することは、アッバース朝成立期の版図がバルヒー以下の念頭にあったことを想起させる。また、ギリシアのプトレマイオス他の天文地理書からイスラーム世界が導入した「気候帯」と経緯度に基づく地図とを採用せず、サーサーン朝の行政地理書から継承したと考えられる非アラブ「州」の区分と各「州」の地図の形状とを採用することに、イランの影響の強さが感じられる。

そして、彼らの地誌はイスラーム圏の「諸国」を扱い、その「諸国」(州・地方)を走る「諸道」(街道)とその「諸道」が結ぶ諸都市とを中心に記述して、「諸道と諸国の学」の典型となった。その後は、バクリーやイドリースィーによって「諸道と諸国の学」の対象地域が居住世界全体へと広がっていく。

また、「バルヒー学派」の地図は、プトレマイオス的な地図作成方法を用いない、幾何学的パターンを多用した模式的な図で、「イスラーム・アトラス」とも称されるものである⁴¹⁾が、フワーラズミー al-Khuwārazmī (236AH/850年頃没)以来のプトレマイオス系統の経緯度を用いる地図と、前近代イスラーム地図学をいわば2分する⁴²⁾。その上、プトレマイオス系統の地図を描く、イドリースィーなどの世界図にも、この模式的な図が取り入れられていく。

「バルヒー学派」間の相違点について言うと、バルヒーとイスタフリーはイラン地域に力点が置かれていたが、イブン・ハウカルとムカッダスィーになると、アラブ地域〔中でも、前者はエジプト、マグリブ・アンダルス、後者はアラビア半島〕の方に力点に移る。そして、バルヒーからイブン・ハウカルまでは、イスラーム圏を20「州」に分けていたが、ムカッダスィーは14「州」に整理し直す。

また、地図について言うと、バルヒーはテキストが地図の附属品であり、イスタフリーもまだその傾向が見られた。ところがイブン・ハウカルになると、地図とテキストの役割が変わり、テキストの方が主役に踊り出た。そしてムカッダスィーでは、それがさらに進み、地図はいわば脇役に甘んじている⁴³⁾。

最後に、繰り返しになるが、バルヒー学派の作品は、その後の「諸道と諸国の学」

41) Miller (1926) [vol. I, pp. 14-23, tables 1-4] (1927) [vol. II, pp. 13*-22*, tables 5-10; vol. III, pp. 1*-12*, 23*-56*, tables 11-36] (1929) [vol. IV, pp. 57*-92*, tables 37-63] (1931) [vol. V, pp. 109-24, tables 64-79]。

42) 竹田 (2004)。Mieli (1966) [pp. 201-02] は、イスラーム地図学の第1期をフワーラズミー、第2期をこのバルヒー学派、第3期をイドリースィーと見る。また、Sūsa [pp. iv-v] はイスラーム地図学の第1学派をインドやイランの地理思想の影響を受けたものとして、フワーラズミーを第2学派、バルヒー学派を第3学派、イドリースィーの前にもう2つの学派を考えている。さらに、Aswad [pp. 199-216] は、マームーン Ma'mūn 図 (=フワーラズミー) の前の段階、マームーン図の段階、天文的諸図の段階、地方諸図 (=バルヒー学派) の段階、イドリースィー諸図の段階に分けている。

43) フワーラズミーの『大地の姿 (形状)』は地図の説明書というよりは地図の付録と考えられ、彼の作品を書き直したあるいは写したと思われるスフラブ Suhrāb (334 AH/945年以後没) の『7気候帯の不思議』K. 'Aḡā'ib al-aqālīm as-sab'a についても同様なことが言える。また、イドリースィーの地理書も居住世界を南北に7帯、西東に10区に分けた70葉の分域地図の説明書と考えてよからう。

の作品を始め、アラビア語作品においては、少なくとも15世紀までの様々な地理書、百科全書、歴史書などに利用・引用され続ける。

[以上、一部はまだ調べ切れておらず、それらの箇所は今回、Krachkovskiy、Miquel の見解に従った。なお掲載した地図は Iş(a)、IH(a) による。]

[略 号]

BGA: *Bibliotheca geographorum arabicorum*, 8 vols., Leiden: E. J. Brill

BMJIA (III): *Buḥūth al-Mu'tamar al-jughrafi al-islāmī al-awwal*, vol. III, Riyadh: Jāmi'at al-Imām Muḥammad bn Sa'ūd al-Islāmīya, 1404 AH/1984

EI: *The Encyclopaedia of Islam*, Leiden: E. J. Brill

IGAIW: Institut für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften an der Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main

[参考文献]

[a]

Iş(a): al-Iṣṭakhrī, *al-Masālik wa-l-mamālik*, ed. Muḥammad Jābir 'Abd al-'Āl al-Ḥīnī, Cairo: Wizārat ath-Thaqāfa wa-l-Irshād al-Qawmī/Dār al-Qalam, 1381 AH/1961

Iş(b): al-Iṣṭakhrī, *K. Masālik al-mamālik (Viae regnorum descriptio ditonis moslemicae)*, ed. M. J. de Goeje, BGA, I, 1870 [repr. 1967]

Iş(c): al-Iṣṭakhrī, *Kitāb al-Aqālīm (Liber climatum)*, ed. J. H. Moeller, Gotha: Libreria Beckeriana, 1839

Iş(d): *Das Buch der Länder von Schech Ebu Ishak el Farsi el Isztachri*, tr. Andreas David Mordtmann, Hamburg: Druck und Lithographie des Rauhen Hauses in Horn, 1845

IH(a): Ibn Ḥawqal, *Kitāb Ṣūrat al-arḍ (Opus geographicum)*, ed. J. H. Kramers, BGA, II, 1938 [repr. 1967]

IH(b): Ibn Ḥawqal, *K. al-Masālik wa-l-mamālik (Opus geographicum)*, ed. M. J. de Goeje, BGA, II, 1873

IH(c): Ibn Hauqal, *Configuration de la terre (Kitab surat al-ard)*, 2 vols., tr. J. H. Kramers & G. Wiet, Beirut: Commission Internationale pour la Traduction des Chefs-d'Œuvre & Paris: G.-P. Maisonneuve & Larose, 1964

Mqd(a): al-Muqaddasī, *K. Aḥsan at-taqāsīm fī ma'rifat al-aqālīm (Descriptio imperii moslemici)*, ed. M. J. de Goeje, BGA, III, 1877 [repr. 1967]

Mqd(b): *Aḥsanu-t-taqāsīm fī ma'rifat al-aqālīm known as Al-Muqaddasī*, tr. G. S. A. Ranking & R. F. Azoo, *Bibliotheca Indica*, vol. I, fascicles 1-4, Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1897-1910 [repr. Frankfurt: IGAIW, 1989]

Mqd(c): al-Muqaddasī, *Aḥsan at-taqāsīm fī ma'rifat al-aqālīm (La meilleure répartition pour la connaissance des provinces)*, partially tr. André Miquel, Damascus: Institut Français de Damas, 1963

Mqd(d): al-Muqaddasī, *The Best Divisions for Knowledge of the Regions*, tr. Basil Anthony Collins, Reading: Garnet, 1994

[a']

AF: Abū 'l-Fidā', *K. Taqwīm al-buldān (Géographie d'Aboulféda)*, ed. M. Reinaud & Mac Guckin de Slane, Paris: Imprimerie Royale, 1840 [repr. Baghdad: Maktabat al-Muthannā, 1966]

Bk(I): al-Bakrī, *Kitāb Mu'jam mā 'ista'jam (Das geographische Wörterbuch des el-Bekrī)*, vol. I, ed. Ferdinand Wüstenfeld, Göttingen, 1876 [repr. Osnabrück: Biblio Verlag, 1976]

- Dm: ad-Dimashqī, *K. Nukhbat ad-dahr fī 'ajā'ib al-barr wa-'l-baḥr*, ed. A. F. Mehren, Saint Petersburg, 1866 [repr. Leipzig: Otto Harrassowitz, 1923]
- Id: al-Idrīsī, *Kitāb Nuzhat al-mushtāq fī 'khtirāq al-āfāq (al-Idrīsī Opus geographicum)*, fascicles I–VIII, ed. A. Bombaci, et al, Naples: Istituto Universitario Orientale di Napoli & Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1970–82
- IN(I): Ibn an-Nadīm, *Kitāb al-Fihrist*, ed. Gustav Flügel, vol. I, Leipzig: F. C. W. Vogel, 1871
- Ish(I/2): Ibn ash-Shaddād, *al-A'lāq al-khaḍīra fī dhikr umarā' ash-Sha'm wa-'l-Jazīra*, ed. Anne-Marie Eddé-Terrasse, vol. I, sec. II, *Bulletin d'études orientales*, XXXII–XXXIII, Damascus, 1981–82, pp. 265–402
- IW: Ibn al-Wardī, *Kharīdat al-'ajā'ib wa-farīdat al-gharā'ib*, ed. Maḥmūd Fākhūrī, Aleppo: Dār ash-Sharq al-'Arabī, 1411 AH/1991
- Mqr(I): al-Maqrīzī, *Kitāb al-Mawā'iz wa-'l-i'tibār fī dhikr al-khiṭaṭ wa-'l-āthār*, vol. I, Būlāq, 1270 AH/1853 [repr. Baghdad: Maktabat al-Muthannā, 1970]
- Nw(I): an-Nuwayrī, *Nihāyat al-arab fī funūn al-adab*, vol. I, Cairo: Dār al-Kutub al-Miṣriya, 1340 AH/1923 [repr. Cairo: Wizārat ath-Thaqāfa wa-'l-Irshād al-Qawmī, 1964]
- Ql: Qalqashandī, *Ṣubḥ al-a'shā fī ṣinā'at al-inshā'*, vols. III–V, Cairo: Dār al-Kutub al-Miṣriya, 1332–33 AH/1914–15 [repr. Cairo: Wizārat ath-Thaqāfa wa-'l-Irshād al-Qawmī, 1963]
- Qz: al-Qazwīnī, *Āthār al-bilād wa-akhbār al-'ibād*, Beirut: Dār Ṣādir, 1380 AH/1960
- Sb(I): Sibṭ b. al-Jawzī, *Mir'āt az-zamān fī ta'rīkh al-a'yān*, ed. Iḥsān 'Abbās, vol. I, Beirut & Cairo: Dār ash-Shurūq, 1405 AH/1985
- YqI(I): Yāqūt, *K. Irshād al-arīb ilā ma'rifat al-adīb*, ed. D. S. Margoliouth, vol. I, Leiden; E. J. Brill, 1907
- YqM: Yāqūt, *Kitāb Mu'jam al-buldān (Jacut's geographisches Wörterbuch)*, ed. Ferdinand Wüstenfeld, vols. I–IV, Leipzig: F. A. Brockhaus, 1866–73

[b]

- Ahmad, Nafis (1947) *Muslim Contribution to Geography*, Lahore: Ashraf
- Ahmad, S. Maqbul (1965) “Djughrāfiyā”, *EI*, new ed., vol. II, pp. 575–87
- Ahmad, S. Maqbul (1995) *A History of Arab-Islamic Geography*, Amman: Al al-Bayt University
- Alavi, S. M. Ziauddin (1965) *Arab Geography in the Ninth and Tenth Centuries*, Aligarh: Aligarh Muslim University
- 'Alī, Shafīq 'Abd ar-Raḥmān (1984) “Madāris al-jughrāfiyā 'inda 'l-muslimīn,” *BMJIA* (III), pp. 231–67
- al-'Arabī, Ismā'īl (1994) *Dawr al-muslimīn fī taqaddum al-jughrāfiya al-waṣfiya wa-'l-falakīya*, Algiers: Dīwān al-Maṭbū'āt al-Jāmi'iya
- Aswad, Falāḥ Shākir (1984) “Dawr al-'Arab wa-'l-muslimīn fī rasm al-kharā'it,” *BMJIA* (III), pp. 183–230
- Barthold, V. V. (1930 [1937]) [V. V. Barthold's Preface to *Hudūd al-'ālam 'The Regions of the World'*, tr. V. Minorsky, London: Luzac]
- Blachère, R. (1934 [1957]) *Extraits des principaux géographes arabes du Moyen Age*, Beirut & Algiers [revised ed. R. Blachère & H. Darmaun, Paris: Librairie C. Klincksieck]
- Dozy, Reinhart (1861) *Histoire des Musulmans d'Espagne*, vol. III, Leiden: E. J. Brill
- Dunlop, D. M. (1971) *Arab civilization to A. D. 1500*, London: Longman
- de Goeje, M. J. (1871) “Die Istakhrī-Balkhī Frage,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 25, pp. 42–58
- Ḥamīda, 'Abd ar-Raḥmān (1969) *A'lām al-jughrāfiyīn al-'Arab wa-muqatafaṭ 'an āthāri-him*, Damascus: Dār al-Fikr
- Hopkins, J. F. P. (1990) “Geographical and navigational literature,” M. J. L. Young, J. D. Latham and R. B. Serjeant (eds.) *Religion, learning and science in the 'Abbasid period*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 301–27
- al-Jālūdī, 'Ilyān (1999) “Dār al-Islām fī 'l-qarn ar-rābi'/al-'āshir al-milādī Qirā'a fī 'd-dalālāt as-siyāsiya wa-'l-madhhabīya min khilāl Kitāb Aḥsan at-taqāsīm li-l-Maqdisī,” Fārūq 'Umar Fawzī & Hind Abū 'sh-Sha'r (eds.), *Buḥūth muhdā li-l-Ustādh ad-Duktūr Sayyid Maqbūl*

- Aḥmad, Maḥraq: Jāmi'at Āl al-Bayt, pp.73-122
- Kamal, Youssouf (1930-2) *Monumenta cartographica Africae et Aegypti*, vol. III, fascicles 1-2, Cairo [repr. Frankfurt: IGAIW, 1987]
- Khuṣbāk, Shākir (1975) *Fī 'l-jughrāfiya al-ʿarabiya*, Baghdad: Maṭbaʿat Dār as-Salām
- Krachkovskiy, I. Y. (1957), *Izbrannye sochineniya*, vol. IV, *Arabskaya geograficheskaya literatura*, Moscow & Leningrad: Ak. Nauk SSSR
- Kramers, J. H. (1932) "La question Balḥī — Iṣṭahrī — Ibn Ḥauḳal et l'Atlas de l'Islam," *Acta Orientalia*, 10, pp. 9-30
- Kramers, J. H. (1936) "Djughrāfiyā," *EI*, suppl., pp. 61-73
- Kramers, J. H. (1954a) "L'influence de la tradition iranienne dans la géographie arabe," *Analecta Orientalia* I, Leiden: E. J. Brill, pp. 147-56
- Kramers, J. H. (1954b) "La littérature géographique classique des Musulmans," *Analecta Orientalia* I, pp. 172-204
- Leeuwen, A. P. van & A. Ferre (eds.) (1992) *Kitāb al-Masālik wa-l-mamālik d'Abu Ubayd al-Bakrī*, vol. II, Tunis: ad-Dār al-ʿArabīya li-l-Kitāb
- Mieli, Aldo (1966) *La Science Arabe et son rôle dans l'évolution scientifique mondiale*, Leiden: E. J. Brill
- Miller, Konrad (1926-29) *Mappae arabicae: Arabische Welt-und Länderkarten des 9.-13. Jahrhunderts*, vols. I-IV, Stuttgart [repr. Frankfurt: IGAIW, 1994]
- Miquel, André (1967) *La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11^e siècle*, vol. I, Paris & The Hague: Mouton
- Miquel, A. (1971) "Ibn Ḥawḳal," *EI*, new ed., vol. III, pp. 786-88
- Miquel, A. (1978) "al-Iṣṭahrī," *EI*, new ed., vol. IV, pp. 222-23
- Muḥammadayn, Muḥammad Maḥmūd (1984) *at-Turāth al-jughrāfī al-islāmī*, revised ed., Riyadh: Dār al-ʿUlūm
- Mukhlis, ʿUday Yūsif (1973) *al-Muqaddasī al-Bashshārī ḥayātu-hu wa-manhajū-hu*, Najaf: Maṭbaʿat an-Nuʿmān
- Muʿnis, Ḥusayn Maḥmūd (1967) *Tārīkh al-jughrāfiyā wa-'l-jughrāfiyīn fī 'l-Andalus*, Madrid: Maʿhad ad-Dirāsāt al-Islāmīya
- Nallino, C. A. (1894-95) "La Bibliotheca Geographorum Arabicorum di M. J. de Goeje," *Cosmos*, series II, 12, fasc. II, Torino, pp. 45-63
- Reinaud, M. (1848) *Géographie d'Aboulfēda*, vol. I, *Introduction générale a la géographie des Orientaux*, Paris: Imprimerie Nationale [repr. Frankfurt: IGAIW, 1985]
- Sezgin, Fuat (ed.) (1992) *Studies on Ibn Ḥauḳal (2nd half 10. cent.) and al-Iṣṭahrī (1st half 10. cent.) Collected and Reprinted*, Islamic Geography, vol. 31, Frankfurt: IGAIW
- ash-Shāmī, ʿAbd al-ʿĀl ʿAbd al-Munʿim (1981) *Juhūd al-jughrāfiyīn al-muslimīn fī rasm al-kharāʾiṭ*, Kuwait: al-Jamʿiyya al-Jughrāfiya al-Kuwaytiya
- Shawka, Ibrāhīm (1962) "Kharāʾiṭ jughrāfī al-ʿArab al-awwal," *Majallat al-Ustādh*, 10, Baghdad: Maṭbaʿat al-Ḥukūma, pp. 37-68
- Sprenger, A. (1864) *Die Post-und Reiserouten des Orients*, Abhandlungen der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft, vol. 3, no. 3, Leipzig: F. A. Brockhaus [repr. Amsterdam: Meridian, 1962]
- Sūsa, Aḥmad (1974) *ash-Sharīf al-Idrīsī fī 'l-jughrāfiyā al-ʿarabiya*, part I, Baghdad: Niqābat al-Muhandisīn al-ʿIrāqiya
- Tibbetts, Gerald R. (1992) "The Balkhī School of Geographers," J. B. Harley & David Woodward (eds.) *The History of Cartography*, vol. 2, book 1, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 108-36
- Ziyāda, Niqūlā (1962) *al-Jughrāfiya wa-'r-raḥalāt ʿinda 'l-ʿArab*, Beirut: Dār al-Kitāb al-Lubnānī
- 竹田新 (1983) 「Iqlīm 考 — Yāqūt を基に —」『オリエンツ』26/2, pp. 75-94
- 竹田新 (2004) 「地図学 (イスラムの)」『歴史学事典』11, 弘文堂, pp. 466-67